



辺境の想像力
- エチオピア国家支配に抗する少数民族ホール
宮脇幸生 著

本書は、エチオピア西南部に生きるクシ系農牧民ホールについての人類学的研究である。著者は、ホール社会を近代化・グローバル化から孤絶した万古不易の集団として描いてきた従来の民族誌に対する批判を出発点にして、今日のホール社会のありようはむしろ国家支配との関係性の中で構築されてきたと主張する。このプロセスを著者は「辺境化」と呼び、このキーワードを軸にして本書全体の議論が展開されている。

序章に続き、3部計14章からなる。第Ⅰ部では、家父長制と年齢階梯制を柱とするホール社会の権力構造がオーソドクスな民族誌記述のスタイルで記述される。同社会の概要、生態環境と生業、家父長制、戦争とそれに関連する儀礼、卓越した能力を持つ存在である「カウォット」(首長)が順次取り上げられる。

第Ⅱ部では、ホール社会の「伝統」が、世界経済や国家支配との関係性の中でどのように構築されてきたかが、19世紀、エチオピア帝国成立期、イタリア占領期、イタリア撤退後のハイレ・セラシエ時代、エチオピア革命後から現在という五つの時期区分に沿って検討される。

第Ⅲ部では、国家支配あるいはホール社会の伝統支配に対する抵抗実践という観点から分析が展開される。歴史記憶と精霊憑依カルトの問題を取り上げた章に続き、最終章は、著者の友人・情報提供者であるホラ・スラ氏という個人に焦点が当てられ、「伝統と近代」の「融合」という観点から考察が展開されている。

先行研究の持つ時代拘束性を批判的に再検討・再評価しつつ、対象社会を歴史の変動の層において捉えることを目指すのが、近年、社会・人文科学の方法論として定着するに至った「歴史化」であるが、本書は、地道なフィールドワークの成果と歴史研究の成果の接合という形で、それに挑戦している。北東アフリカの社会と歴史に関する豊富な知識を提供してくれるだけでなく、こういった方法論的な面についても考えるヒントを与えてくれる意欲的な労作である。

(佐藤 章)

京都 世界思想社 2006年 vi+513p.



現代の牧畜民
- 乾燥地域の暮らし
池谷和信 著

本書は、1991年から著者が続けてきた牧畜民研究のまとめであり、地理学研究者によるフィールドワークの成果を社会還元する目的で企画された日本地理学会「海外地域研究叢書」の一冊として刊行されたものである。

ユーラシア、アフリカ、南アメリカの各大陸に暮らす現代の牧畜民を、著者は大きく「北の牧畜民」と「南の牧畜民」に分けており、とくに後者のうちアフリカ大陸のソマリとフルベ、南アジアのライカに焦点をあてた。これら「商業牧畜民」をとりまく生態と政治経済をあわせて、ポリティカルエコロジーの視角からの把握を試みるとともに、乾燥地域での暮らしの理解をめざしている。

本論部分は第1章「牧畜民とは誰か?」から始まり、全9章からなっている。第2章で世界の牧畜について展望した後、フィールドワークの成果が紹介される。第1部として括られた第3、4、5章ではソマリとフルベについて、第2部とされた第6章ではライカについて、それぞれの生活誌が多くの写真や図表とともに描き出されている。

残る三つの章は、「グローバル化と『商業牧畜民』の新たな形」と題された第3部となり、家畜流通の国際的展開、牧畜民の都市移住、そして開発をめぐる問題が紹介されている。国家の政策や国民経済に加えて、よりマクロな問題との関わりから牧畜民の変化を捉えようとする著者の姿勢がうかがえる。

「現代に生きる牧畜民の多様な生活の実態、および彼らがかかえている諸問題を紹介する」(p.2)という著者の意図は、本書のつくりにもあらわれている。第1章には「本書理解のための基礎知識」という一節が設けられ、また「巻末資料：世界の牧畜民を知るための文献案内」も充実しており、読者の理解と興味を深める工夫と言えるだろう。

(望月克哉)

東京 古今書院 2006年 v+197p.



文化人類学のレッスン - フィールドからの出発

奥野克巳・花淵馨也 共編

本書は、フィールドワークを中心にして編まれた文化人類学の入門書である。若手文化人類学者が主な執筆者である。各章の構成はほぼ同じで、執筆者が担当章のテーマについての文化人類学における歴史的な議論の流れを簡潔にまとめたあと、各研究者の実際のフィールドワークでの調査を紹介するという形をとっている。入門書を意識してか、「章」ではなく「レッスン」として、全部でレッスン10までである。

文化人類学をこころざす入門者を対象としているだけあって、わかりやすい記述に徹している。また、先行研究についても丁寧に説明されており、各研究者のフィールドワーク報告と合わせて、具体的にイメージを描きやすい。

取りあげているテーマは、民族、家族と親族、性、儀礼、宗教と呪術、死、文化、グローバル化と、多種多様である。また、地域も10地域にわたり、そのうちアフリカは、エチオピア(ボラナ)、ケニア(ルオ)、ベナン(アジャ)、コモロ、ウガンダ(ジョパドラ)の5地域である。各レッスンはテーマごとに完結しており、どこから読み始めても違和感はない。なお、本文のほかに「キーワード」、「コラム」といった囲み記事があり、本文についての補足説明や、詳細な情報が提供されている。レッスンごとに参考文献のほかに推薦図書も挙げられており、関心をもった分野について、さらに理解を深めることもできる。

各レッスンはよくまとまっており、面白く読みすめられるが、特に「文化」を取りあげたレッスン9(渥美一弥/カナダ・サーニッチ)や、「グローバル化」を取りあげたレッスン10(梅屋潔/ウガンダ)の章は、現在の文化人類学の状況を窺い知ることができるという意味でも、非常に興味深い。グローバル化とともにさまざまな「文化」が複雑に影響を与え合う現在における文化人類学の位置づけや、フィールドワークの意義について考えさせてくれる。格好の文化人類学の入門書である。

(児玉由佳)

東京 学陽書房 2005年 xi+265p.



京大式フィールドワーク入門

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
京都大学東南アジア研究所 編

本書は、フィールドワークを行う人の必読本といっても過言ではないだろう。フィールドワークを行うにあたりどのように問いを立てるべきか、データをどう集めるべきか、それらをどう分析し最終的な成果につなげるのか等が、実際の研究論文を題材にして説明されており、非常に参考になる。

本書は全8章で構成されており、フィールドでの発見から一般的なモデルの構築まで順を追って説明されている。第2章では、フィールドでの気づきを論文の「問い」に導く方法が説明されており、続く第3章と第4章では、計測やインタビュー調査でデータを取得し分析する方法が紹介されている。第5章では、フィールドワークによる研究は、時にはさまざまなディシプリンを超えて考察することが必要とされるため、学際的研究を行うことの大切さに言及している。第6章と第7章では、サーベイ型調査と事例研究について詳細な説明がなされており、それぞれの長所短所を論文にどう活かすのかといったことにも言及されている。第8章では、特定地域を題材にしたフィールドワークによる研究から、より汎用性の高い一般的なモデルを構築する過程が紹介されている。

本書ではこうした説明を、9本の研究論文を題材に行っている。これらの論文は、さまざまな分野、地域にわたっており、普段あまり触れることのない分野の論文を読むことができる点でも非常に有益である。

ただし欲を言えば、フィールドワークを行うにあたり、どういった機関や人物にお世話になり調査を行っているのか、どのように調査対象地域を選定しているのか等、具体的な事例についての言及も欲しかった。一般に、他の人がどういったフィールドワークを行っているのか、知る機会はあまりない。そのためこうした具体例がコラムなどで言及されていると、読者がフィールドワークを行うにあたり、有益な情報になったのではないかと思う。

(原島 梓)

東京 NTT出版 2006年 viii+162p.





ぼくもあなたとおなじ人間です。
 - エイズと闘った小さな活動家、
 ソコシ少年の生涯
 ジム・ウーテン 著 酒井泰介 訳

母子感染により、生まれながらにHIV(エイズウイルス)を体内にもつ黒人少年ソコシと、HIV/AIDSとともに生きる人たちのためのホスピスやシェルターを運営し、ソコシの養母となる白人女性ゲイル。本書は、この2人の南アフリカ人の生い立ちと出会い、そしてソコシの早すぎる死による別れまでを描くドキュメンタリーである。

ソコシの実母ダフネは、母子ともにHIV陽性という診断を聞き、せめて息子だけは助けたいとの思いから、ゲイルのホスピスを訪れてソコシを預ける。ゲイルは、経営難でのホスピス閉鎖後もソコシを養子として育て、学齢期に達したソコシを小学校に入れようとするが、ソコシの入学をめぐり、子どもを同じ学校に通わせる父母が反対運動を起こし、その経緯が大きく報道されると2人は一躍有名人となった(結局入学は認められた)。この2人の評判は海外にも及び、2000年に南アフリカで開催された国際エイズ会議の開会式スピーチにソコシが抜擢された。「HIVがエイズの原因ではない」と発言し、会場を失望させたムベキ大統領の横で、ソコシは自らの体験と、他界した実母ダフネへの想いを語り、母子感染予防のための抗エイズ薬の普及を訴えた。本書の題名は、この演説の締めくくりの言葉からとられている。翌年、12歳でソコシは世を去るが、その名はゲイルが運営するHIV陽性女性とその子どものためのシェルター「ソコシズ・ヘブン」に残されている(なお、本書では「ソコシの天国」と訳されているが、Heavenではなく避難所を意味するHavenの誤りである)。

ゲイルの献身的な愛を強調し、「お涙頂戴」的な要素もある本書には、エイズ問題への関心から読むと物足りなさも感じる。ただ、ソコシの生涯は途上国での抗エイズ薬普及の大事な一部分をなしており、読んでおいて損はない。最近のマラウイでのマドンナの養子騒動を想起させる、ゲイルとソコシの実の祖母らとの確執のくだりも興味深い。

(牧野久美子)

東京 早川書房 2006年 250p.



絵はがきにされた少年
 藤原章生 著

本誌読者の多くは、アフリカの飢餓を切り取った傑作として1994年のピュリッツァー賞を受賞した写真「ハゲワシと少女」を覚えておいでであろう。地面に突っ伏した黒人の瘦せた子供と、その背後で子供を狙うかのように地面に降り立った巨大なワシを捉えた作品。「写す前に子供を救うべきだった」と強い批判に晒された写真家が、受賞後に自殺したことで話題となった。本書は、新聞特派員としてアフリカに駐在した著者による11の掌編からなるが、その第1章「あるカメラマンの死」は、この写真撮影の顛末に新たな光を当てて特に強い印象を残す。著者の取材を受けた男性(件の写真家が撮影する瞬間に居合わせた同行者)は著者にこんなことを語る。

「親?親はすぐそばで食糧もらうのにもう必死だよ」「……撮ってたら、その子の後ろにハゲワシがすーっと降りてきたんだ……またすーっと消えてったって」「俺にいわせりゃ、少し馬鹿げてるよ、少女を……救えったって、すぐそばに母親がいるんだぜ」(pp.23-25)

子供は母親と一緒にだった、ワシは地面に一瞬降りただけ……。それが事実とすれば、あの写真を見てアフリカの悲惨に慄然とした(私も含む)鑑賞者たちの、なんと滑稽で、そして残酷なことか。土の上の黒人の子供とワシを見せられると、飢餓・悲惨・残酷な死を見取ってしまうその想像の形式、そういう写真だとニューヨーク・タイムズの1面にカラーで掲載されてしまう現状。「救う対象としてのアフリカ」というまなざしの背後にある共犯関係を、著者の取材は白日の下に晒して見事である。その他、裸でクリケットをしていた少年時代のスナップが絵はがきになっていることを発見し、額に飾って喜ぶ老人の姿と、「踏みにじられたアフリカ人の気持ち」を書けと催促する東京のデスクとの間で沈思する表題作など。アフリカ報道にありがちな権力批判からも、お涙頂戴からも、徹底的に距離をとろうとする著者の姿勢そのものが強い印象を残す、優れた作品集である。

(津田みわ)

東京 集英社 2005年 259p.



大西洋の海草のように

ファトゥ・ディオム 著
飛幡祐規 訳

1998年のサッカーW杯。フランスが優勝の栄冠に輝き、「黒人・白人・アラブ(Black, Blanc, Beur)」という言葉が流行した。当時この言葉はフランスの移民同化政策の成功を示すものとして叫ばれた。2006年のW杯。フランス代表チームの選手の8割を移民もしくは移民の子孫が占めた。W杯後には社会党幹部の「黒人ばかりで恥ずかしい」という発言がフランス社会で物議を醸した。現在、フランスの国民の約1割は移民である。その中には、サッカーで成功することを夢見て滞在許可証もなくアフリカからフランスに渡ってきた数多くの若者たちも含まれる。今やフランス・サッカー界は移民抜きには語れなくなっている。

冒頭からサッカーの試合中継の描写で始まる本書は、フランスに住むセネガル出身の女性作家の自伝的小説である。故郷の小村を離れた女性サリを語り手として物語は進む。サリには故郷に残してきた弟があり、彼は村の大半の若者たちと同様、フランスに渡ってサッカー選手になることを夢見ている。サリには見えているフランス社会の厳しい「外国人」差別の現実が彼らにはまるで見えていない。テレビが映し出す欧州杯の映像。欧州サッカー界で成功している同郷者たちの雄姿。家長長制の強い村で家族に対し若者たちが負う扶養義務。さらに、フランスでの出稼ぎを成功話として語る村の男。そうしたさまざまな要素がフランスに対する若者たちの希望と幻想を膨らませる。

本書を読むと、フランス・サッカー界の華々しさの陰にあるものが見えてくる。かつての宗主国と植民地が今も抱えるアンバランスな関係、移民に対するフランス社会の差別の実態、セネガルの小村の家長長制的な伝統と閉鎖性。本書ではそうした現状がサッカーを軸にしながつづさに描き出されている。作者が本書で取り上げている問題は複雑多岐で、どれも簡単には解決策が見つからない。それにもかかわらず、作者の軽快で躍動的な、そして時にユーモラスな語りにより、まるでサッカーの試合を見るように見事に引き込まれてしまう。

(岸 真由美)

東京 河出書房新社 2005年 256p.



ブラック・アトランティック - 近代性と二重意識

ポール・ギルロイ 著
上野俊哉, 毛利嘉孝, 鈴木慎一郎 訳

「私とは何なのだろうか？ 私がもっとも私自身らしいのはどんな時なのだろうか？」アメリカの黒人モダニスト作家がその作品を通じて追い求めた問いを、筆者はこう表現する(p.139)。しかし、これこそ筆者を文化研究に駆り立て、本書を執筆させた根源的な問いではなかったろうか。それは、文学、音楽、美術と多岐にわたるディアスポラ黒人文化の読解が試みられる本書における、通奏低音となっている。アフリカ系であること、イギリスに住んでいること、西洋の内側にいながら、同時にその外部にいること……。筆者は、自分がそのような自分であることの意味を徹底して問う。そして、その問いは、近代性、人種、ナショナリズム、ジェンダーといった今日の重要な問題群とつながり、それらの通説を建設的に組みかえていく。

1993年に出版され、文化研究の分野で大きな反響を呼んだ原著は、長く翻訳が待たれていた。出版後13年を経たとはいえ、それが日本語で読めるようになった意義は大きい。訳出も、内容の難解さに甘えることなく、丁寧になされている。

マンデラが初めてアメリカを訪問した際、デトロイトでの演説で、ロベン島の刑務所ではモータウン・ミュージックに慰められたと述べたというエピソード(p.188)は印象的だ。筆者がいうように、それはアフリカ中心主義に対する脱構築の意味を持ったのだろう。アフリカの文化は、「東から西への一方通行」では決してない。さらに、アフリカ研究者にとって本書の意味は何なのかと考えながら読んでいた私にも、このくだりは痛撃だった。ギルロイの議論は、まさにモータウン・ミュージックのような普遍性を獲得しているのだ。近代に生きる黒人をめぐる思索を突き詰めた先に普遍性が開けてくることを、本書は示している。現代のアフリカに関心を持つ者には、さまざまな意味で刺激に満ちた一冊となろう。

(武内進一)

東京 月曜社 2006年 460p+lxvii.

